
モンスターハンター ~紅夜叉伝~

モンスターあんばん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～紅夜叉伝～

【Nコード】

N6290Y

【作者名】

モンスターあんばん

【あらすじ】

モンスターハンターの世界に転送された学生が、モンスターを狩る物語です。

第一狩り 誘拐犯には気をつける!! (前書き)

初めての投稿です!

駄文ですが読んでみてください!!

何か悪い点やいい点があれば感想を下さい!!

お願いします!!

第一狩り 誘拐犯には気をつける！！

俺の名は、紅龍牙。くれないりゅうが えんおうがくえん炎王学園の3年生だ。

今、見知らぬ場所で監禁されている。というよりも誘拐された。隣には俺の友人の白石修矢しろくししゅうやもいる。

俺たちの両手両足には手錠がはめられている。

俺たちが誘拐犯の事に気づけていたらこんな事にはならなかったと悔やんでいる……

* * *

時系列は変わり、二時間前。

俺たちは炎王学園から帰宅している最中だった。

「龍牙、今朝のニュースで、またもや孤児誘拐事件が起きたそうだ」

「またか！これで5人目じゃねえか！」

「ああ、それに付け加えて誘拐された孤児は10代後半らしいぞ」

「俺たちと全て該当してるじゃん……」

俺たちの両親は交通事故で亡くなっている。

親戚もいなかったので、今は施設で暮らしている。

「あと、全員スタンガンで気絶させられたらしい。まあ、気を付ければいいじゃないか」

誘拐されるかもと思わないのかよ修矢は……

「うん、僕はこんな事は考えたくないポジティブ人間だから」

「俺の心を読んだっ！！」

「何年君と友人でいると思っっているんだ。これぐらいは出来て当たり前だろう？」

「俺はお前の心を全く読めねえよ！！」

なんで修矢は読めるのに俺は読めないんだっ！！

と、考えていたら急に俺たちの横に自動車が止まる。

すると自動車の扉が開き男が出てくる。

風貌は真っ黒いパーカーにサングラスにマスクをした身長190cm程度の太男。

見るからに怪しそうなんだけど……もしかして、誘拐犯？

男はポケットから小型の機械のようなものを取り出す。

スタンガンだ。

「ええ！！スタンガン！！」

誘拐犯じゃん！

誘拐犯はいきなりスタンガンの電極部を修矢に突き出した。

しかし、修矢はバク転で回避した。

おお、いつ見てもスゴイな修矢のバク転。
昔からキレイなフォームで出来ちゃうから羨ましい。

と、感心していたらバク転の着地時を狙われスタンガンの電極部が
ヒットする。

バチチツ

「あああああ……」

ドサツと音を立てて足からくずれる修矢。

ま、まさかあの修矢が……

このままじゃ誘拐されてしまう！これだけは阻止しないと！！

俺は決心を固め、誘拐犯に殴りかかった。

が、誘拐犯もスタンガンを俺に向かって突き出す。

でもなあ、そんな事お見通しだアアアア！！

俺の身体をスタンガンに対し水平にずらして回避し、スタンガンを
持つ手を捻りあげる。

「うう……」

あまりの痛さにスタンガンを落としてしまう男。

勝機！

捻りあげた手とは逆の足を俺の足でひっかけ転ばせる。
そして倒れた誘拐犯の顔面に殴りかかる。

これで誘拐事件を終わらせる！！

しかし、俺は見てしまった。

もう片方の手にスタンガンが握られているではないか！！

スタンガンの電極部が俺の身体にヒットする。
俺の身体に電流がまわる。

「あああああああ……」

がああ！痛い！痛いを通り過ぎて死にそうだア！！
嗚呼、意識が朦朧とし・て・き・た・

* * *

俺の回想終了

ただ今、脱出しようとして二人で手錠を壊そうとしている。
でも、この手錠頑丈だからなかなか壊れない。

このままじゃ…ダメだダメだあきらめてはいけない。脱出するんだ！
と、思った矢先に俺の夢が音を立てて崩れた。

あの誘拐犯が監禁された部屋に入ってきたからだ。

ガラガラガツシャアアン

「ん？何だこの崩れたような音は？」と修矢。

「つて！お前聞こえたのかよ！」

ツッコミをした時に誘拐犯が俺たちの近くに三本の筒を置く。
一本目は短く、二本目は普通、三本目は長い。

「オイ！テメエ！俺たちを……無視してんじゃねえよ！オイ！聞こえてんのか！」

「僕は無視はしていないが……」

「修矢じゃねえよ！そもそもお前のことテメエって言うか！」

誘拐犯は気にせず機械をイジリ始めた。

すると、俺たち（三本の筒も）が青い膜に包まれる。
手錠も外れた。

脱出を試みるが出来ない。

ええ！？何だこれええええ！？

『異次元転送まであと3秒』と機械音。

『3』

はアアアアアア！？

『2』

異次元転送って

『1』

何イイイイイイ！？

『0』

そこからまた記憶がなかった。

第一狩り 誘拐犯には気をつける！！（後書き）

1週間に1回の亀投稿になると思われます。
では次の話で！！

第二狩り 得体の知れない奴と戦う時は必ず武器を（前書き）

皆さんお待ちかねのモンスターとの戦闘が始まりますよ！！

今回は3rdなら最初で戦うであろうモンスターです！！

では、どござー！！

第二狩り 得体の知れない奴と戦う時は必ず武器を

あれ？ここはどこだ？

っ！か、俺は何をしている？

仰向けで目をつぶって倒れている。

気付いてんじゃない！と、俺自身にツッコミをいれる。

ベチヨ

俺の顔面にネバネバした液体が付く。

うえー！？き、気持ち悪い！

何があつたか知るため目を開ける。

目の前に得体の知れない大きなエリマキトカゲが涎よたれを垂らし見ている。

「うっ、うわアアアアアア！何じゃコイツウウウウ！！」

超大きい声で叫んじゃった。しかも、反射的に足を蹴り上げる。

ギャウウウウウ

エリマキトカゲが痛みで呻うめく。

い、今が逃げるチャンスだ！俺はがむしゃらに全速力で駆け出す。

「どこか隠れる場所は無いのか！？」

走りながら呟いていると洞窟を見つけた。
俺は素早く岩陰に息を殺して潜む。

これなら見つかることは絶対に無いだ「……………

しかし、エリマキトカゲは洞窟まで追ってきた。

つてえ！バレてたのか！！ヤバイぞこれじゃあ『籠かごの中の鳥』状態だ。

ホウホツホツホツホツホツホツホウウウウ

突然吠え出すエリマキトカゲ。すると、洞窟のいたるところから小エリマキトカゲが出現する。

その総数10匹。

で、俺は小エリマキトカゲにあえなくあっさり容易に簡単に見つかる。

見、見つかったアア！あんな得体のしれないエリマキトカゲどうすりゃいいんだ！？

素手で戦うしかないのか！？武器があれば何とかなるのにいい！！
こうなりや素手で倒してやる！

あ……………囲まれた……………。

「……………」

鬼畜だ。もうリンチのレベルだよ。俺二狩り目で死亡！？語り手いなくなるよ？

まあ、なんやかんやで小エリマキトカゲの二匹が左右から跳びかかってくる。

「なんやかんやって何だアアアア！！！」

ツッコミながら上段の回し蹴り。

その回し蹴りは小エリマキトカゲにクリーンヒットし絶命した。仲間が殺れて怒ったのかもしれない、小エリマキトカゲが次々と跳びかかってくる。

しかしその小エリマキトカゲを次々と蹴り殺す。

一匹ならばニーバットや、かかと落としで。二匹以上は回し蹴りで。

「ハア、ハア……。残りはお前だけk……。ぐはっ！！！」

いきなりエリマキトカゲが尾で俺の腹を叩く。

痛え、痛えええええ！！おもいつきりムチで叩かれたみたいだアア！！

あまりの痛さに体勢を崩し尻餅をついてしまった。

刹那、エリマキトカゲは跳びかかり俺の腹の上に着地した。

痛い、痛いいいいい！！胃の中の物が出てしまいそうだアア！！

それはその時を待っていたような攻め 否、その時だけを狙った攻めだった。

エリマキトカゲはその状態のまま口を大きく開く。

鋭利そうな牙が怪しく光る。

エリマキトカゲはそのまま俺の頭に牙を近づけてきた。

死……死ぬ……

第二狩り 得体の知れない奴と戦う時は必ず武器を（後書き）

次回の後書きからキャラ紹介とモンスター紹介をしていきたいと思
っています。

では、第二狩りで！！

第三狩り 素手より武器の方がやっばいい(前書き)

投稿遅れてすみません

また遅れてしまうかもしれない

まあ、今回も読んで下さい

第三狩り 素手より武器の方がやっぱりいい

「死なせない！！」

ヒュン

俺の後方から男の声と風を切る音が聞こえた。

目を開けて見るとエリマキトカゲの目に矢が刺さっていた。

エリマキトカゲは俺の身体から大きく後退していた。

誰が救ってくれた！？

後ろを振り返る。

後ろにいたのは……修矢！

白銀の弓を構え矢を放とうとしている、修矢。

「しゅ、しゅ、修矢アア！！」

もの凄くいいタイミングに来るじゃん！超絶カッケエエ！！

「ハア…助けにこれて良かった…けど、ジャギイは素手 否、素足で倒したか…」

「オイ、この弓はどうしたんだ？」

「ああ、これは誘拐犯が異次元転送の前に置いた筒の中の武器だ。お前の得意な武器があるぞ」

修矢は筒を投げてきた。

俺は筒を空中でキャッチする。

筒を開けるとあったのは、1m弱の一本の大太刀。太刀を鞘から引き抜く。

「おお……刃が紅い太刀か……超力ツケエ!!」

そう、俺は太刀の扱いが得意だ。

何故なら、俺は剣道・居合道・薙刀道の三つを習い師範を超えている。

(ちなみに修矢は弓道で師範を超えている。)
太刀の扱いなら十八番だ。

グルルルルル……

エリマキトカゲは矢のダメージから立ち直っていた。

俺は太刀を大上段に構える。

修矢は弓矢を構える。

エリマキトカゲは鋭い視線で俺たちを睨む。

静寂

最初に静寂を破ったのはエリマキトカゲ。

ギャア！

俺に向かって跳びかかる。

牙を光らせて、頭に噛み付こうとする。

刹那、俺は太刀を大きく振り下ろす。

紅の刃が閃光を放った。

高速で。

光速で。

ブシャアアアアア

エリマキトカゲを真つ二つに斬殺した。

赤黒い血が辺り一面に飛び散った。

「ドスジャギイを一瞬で狩るとは……」

「まあ、太刀があれば楽だしな。ところで、トドのジャーキーとジャーキーがどうかしたのか？」

「なんで、干された肉のことを言う！あと、トドのジャーキーってオイシイのか!？」

へえー、修矢ってツッコミになると口調が崩壊するのか……以外だ。

「あああああ！ぼ、僕の少し堅い口調が壊れてしまった」

「また、人の心を読んでんじゃねえよ！」

「いいじゃん、いいじゃん！心を読むことの何が悪い！5年間読んでたからいいじゃん！」

「ぐあああつつ！え！？5年間読んでたの！！本気かよ恥マツずかしいじゃん！」

「つか、口調が戻らないし…」

『僕の口調を崩壊した罪はおもいぞ…龍牙……』ゾゾゾゾゾ

「怖ッ！命の恩人なのに怖ッ！！」

何か邪気を放ってるし……鉤括弧変わってるし……

『お前ってカワイイ女子を見ると妄想する時あるだ』

「言つなアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！お、俺が悪かった！ごめんなさいイイイ！！！」

反射的に土下座をする俺。

こんな事まで読んでいるなんて……お、恐ろしい……

「まあ、許してやるよ。で、話は15行前に戻るぞ」

「お…おっ…」

「さっきのはドスジャギイとジャギイというモンスターハンターに出ってくるモンスターだ」

「モンスターハンターってゲームのあれか？」

「ああ、そうだ」

バシャアアアン

後方から大きな水飛沫の音が聞こえた。

第三狩り 素手より武器の方がやっばい（後書き）

今回からキャラクター説明とモンスター説明をやっています。

キャラクター

* 紅龍牙
くれないりゅうが

炎王学園3年生（18）

身長 182cm

有名な剣道、居合道、薙刀道の道場の免許皆伝者

使う武器：太刀

* 白石修矢
しろいししゅうや

炎王学園3年生（18）

身長180cm

弓道部部长で日本一の実力者

使う武器：弓

モンスター説明

* ジャギイ 肉食性の鳥竜種。紫と橙の鱗を持つ。ハッキリいって雑魚。

* ドスジャギイ ジャギイたちのリーダー。頭にエリマキのようなものを持つ。

これからも後書きで書いていくつもりです。
それにしても…モンスターの説明が分かりにくいっ！
なので、モンスターハンターのサイト等で調べてみるとわかります！
では、次の話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290y/>

モンスターハンター ~紅夜叉伝~

2011年12月11日12時47分発行